玉名の遺跡
シリーズ 27

柳町遺跡（やなぎまちいせき）

田
最古級の文字資料

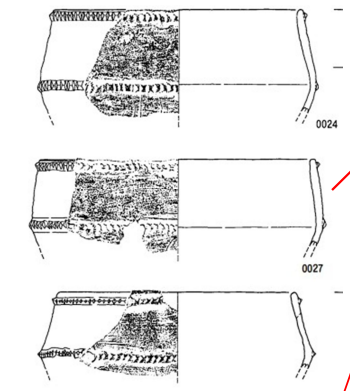
【お問い合わせ】
玉名市教育委員会
文化課文化財係
TEL:0968-75-1136
bunka@city.tamana.lg.jp

遺跡は、菊池川右岸の玉名平野に位置しています。玉名バイパス建設工事に伴い、平成 7～11 年度にかけて熊本県文化課と玉名市の合同調査が実施されました。その成果の一部を紹介します。

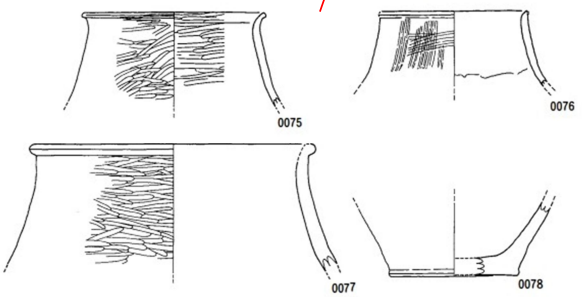
この「柳町遺跡」が全国に知られたのは、平成９年の「日本最古の文字発見！」という報道からでした。遺跡は、弥生時代終末期から古墳時代初頭における低湿地の集落跡で、多くの木製農具などが出土しています。これらは早くから米作りが行われていたことを物語っており、日本遺産―米作り、二千年にわたる大地の記憶～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～の構成文化財の一つとなっています。

縄文時代晩期～弥生時代前期　～稲作をはじめたムラ～

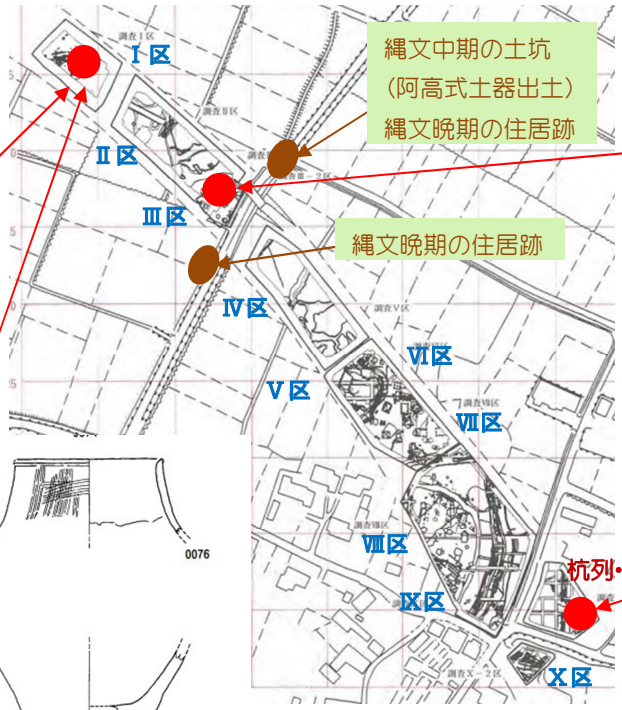
当遺跡において、Ⅰ区では縄文時代晩期等の土器が包含層から出土し、Ⅲ区では土坑内から刻目突帯がある波状口縁の鉢が出土しています。また、そのⅢ区周辺の玉名平野遺跡群からは縄文時代中期の阿高式土器を含む土坑や近年、縄文時代晩期の住居跡から黒川式土器（浅鉢）が出土しています。その後の弥生時代前期になると、Ⅹ区の自然流路から杭列（くい）や堰（せき）が出土し、それに伴って植物のツルで作られた網代（あじろ）も検出されています。このように玉名平野においては、微高地上に小集落が形成され、流路を利用して稲作がはじまったと考えられます。



刻目突帯文土器※

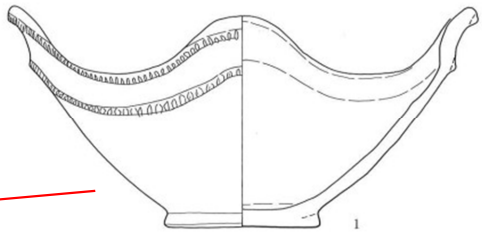


弥生時代前期の土器※



柳町遺跡の調査区図※

（※図は『柳町遺跡Ⅰ』県報告書より）



刻目突帯がある波状口縁の鉢

植物ツル製の網代（あじろ）（弥生時代前期）

出土状況から魚をとったり、何かの水さらしに使用されたと考えられます。

弥生時代終末期～古墳時代前期　～木製品が語る、稲作とムラの様子～

隣接する両迫間日渡遺跡からも弥生時代中期の水田跡（畦畔）が発見されているように、玉名平野においては県内でも早い段階から稲作が行われていたと考えられます。微高地の周囲には菊池川や繁根木川からの自然流路が多くあり、水の確保は容易だったようです。集落には井戸も多く掘られており、その井戸跡から２点の木製短甲が出土しています。特に１号短甲の部品（棒状留具）からは「田」などの５文字が確認され、早くから大陸文化の影響があったことがわかります。

横鍬（よこくわ）　平鍬（ひらくわ）　二又鍬（ふたまたくわ）

出土した木製鍬（くわ）の種類

鳥形木製品

鳥（サギ）は稲のシンボルとされ、農耕儀礼に用いられたと考えられます。

枠型田下駄（わくがたたげた）

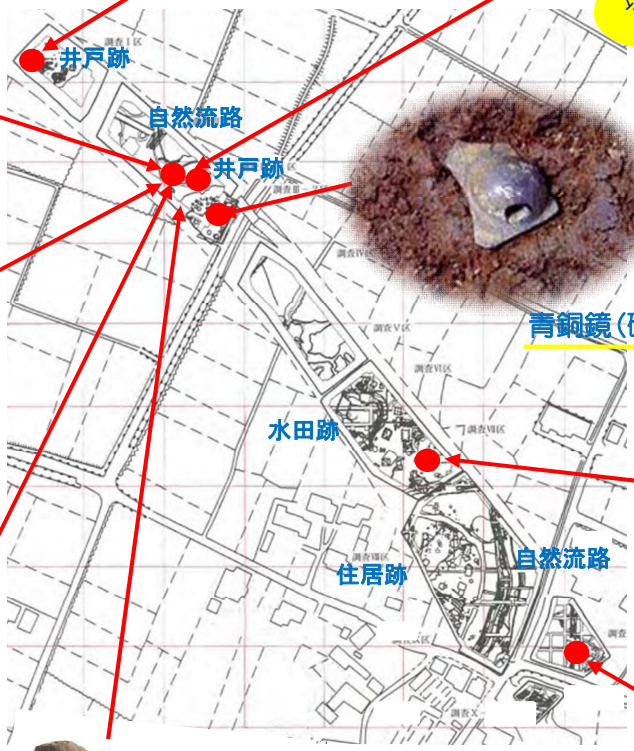
このように組み立てて水田で使用されました。

梯子（はしご）

高床式倉庫などの建物をのぼるためのもので、一本の木から足掛けが加工されています。

竪杵（たてぎね）

臼の中で稲穂の脱穀に使用されました。

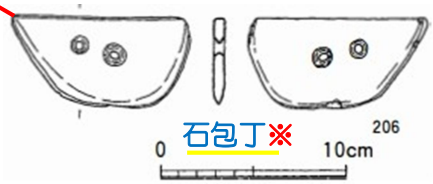


青銅鏡（破鏡）

現代のスコップとほぼ同じ！

木製の鋤（すき）

青銅鏡（破鏡）※



石包丁※

斧柄（おのえ）

先端に鉄斧を付けて使用

杓子（しゃくし）

現代のしゃもじのようなもの。

柳町遺跡の特徴は、何といっても木製品の数と種類が多いことです。約 1500 年もの間、水分を含む粘土層にパックされ残存していました。

これによって、玉名の弥生時代から古墳時代における米作りの様相が明らかになりました。

（※図は『柳町遺跡Ⅰ』・『柳町遺跡Ⅱ』県報告書より）